

毛利高政の嫁・姑は

永遠のライバル？

戸山 恵子

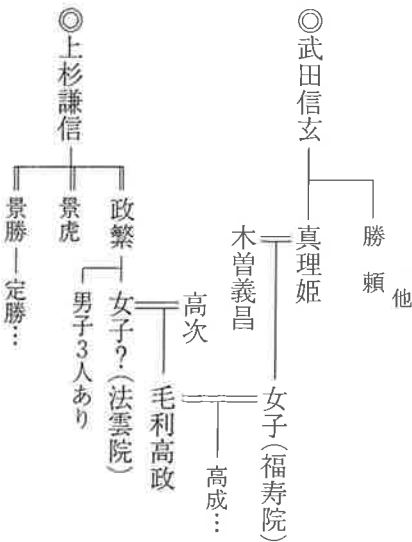
(会員 佐伯市匠南区)

パソコンという便利な機械を使いこなせる人はエライと思います。我が家でも5人中4人までが自由自在にあやつり、マイパソコンで仕事をしています。そのパソコンに「検索」という機能があり、私も最近になってやっとその部分だけ打てるようになりました。すると、もう20年にも及んで調べていたことが、キーボードたたいたとたんに解決してしまい、うれしいやら、びっくりやらで愕然としたことがあります。聞いて下さい。

毛利高政のお母さん、実名は不明ですが、出家後は妙西尼、又は「あぜち様」とも呼ばれ、死後は「法雲院」と号し、一六二七年(寛永四年三月四日)佐伯で亡くな

りました。そして高政の妻、この方も実名は不明ですが「福寿院」とよばれた方(一六三八年・寛永十五年九月二三日没)夫の高政は一六二八年(寛永五年十一月十六日六九才没)。この二人は、姑と嫁の關係にあり、当時はまだ人質制度が確立していなかったので最晩年は共に佐伯で過ごしたと思われま

す。この二人の女性は歴史上有名な方の外孫にあたります。そうです、今年の大河ドラマの主人公、山本勘介が仕えた「武田信玄」とそのライバル「上杉謙信」その人です。





武田信玄とのつながりは、ある程度調べて、その結果も佐伯史談(一四八・二〇二号)に発表させてもらい、その後、確認されてもいますが、上杉家とのつながりは皆無でした。というより上杉謙信は生涯独身、女性説すらあるほどですから実子はいません。養子として、謙信の姉の子である景勝(一五五五―一六三三)、北条家からの養子で、景勝の妹を妻にしている景虎(一五五二―一五七九)この二人が知られています。二人の養子は、養父謙信が急死の二ヶ月後、後継者争いが起き(御館の乱、一五七八)、景虎(二八才)が敗れ、長男(九才)も殺されてしまいます。一方の景勝も長い間、実子には恵まれ

ず(正室の武田勝頼の妹との間には生まれない)側室との間に定勝が一人あるだけというのが定説となっています。このように謙信の子どもといっても二人とも養子、直接に彼の血を受けついで実子はいないわけですから、温故知新録(一)や養賢寺に安置されている法雲院の位牌の裏に書かれてある「謙信公の孫姫なり」は不思議というより、初代藩主にハクをつけただけのマユツバもので、でっち上げ?と思います。それは、当時も今も、義に厚く、清廉潔白なイメージで人気の謙信をもつてきたのだろう…くらいに考えていたからです。

今度は、高政の母(以下法雲院と書きます)の父親、瀬尾小太郎という人物について調べてみました。(温故知新録(一)・一宮市史・鶴藩略史・佐伯市史等)いくつかの資料から非常に断片的ではありますが、まとめると左記のようになりました。

①生国は北陸とのことで、やはり謙信とは結びつかないのではないかと思われました。北陸(加賀・能登)は上杉家全盛期では領土となっていますが、それは謙信が侵略したからで、本拠地は越中・越後ですから。もう一つ、

☆瀬尾小太郎 プロフィール

- ①出身地 北陸（加賀あるいは能登）
- ②祖先 梶原景平
- ③特技 弓矢の達人
- ④居住地 尾張の国、刈安賀村
（愛知県一宮市）
- ⑤石高 3000石
- ⑥主人 織田信安（信長のオジ）
- ⑦死亡 1558年 討死

決定的な事実、瀬尾小太郎がすごした尾張国（今の一宮市）は非常に一向宗がさかんな所でした。（生国北陸も同じ）現に娘の法雲院は熱心な信徒で、佐伯の善教寺は彼女の菩提寺であることから、高政の母や外祖父が一向宗の者であったことは、逆にいえば、謙信とのかかわりはずまず遠のいた感じがしました。それは、謙信は生涯のほとんどを一向宗徒に悩まされてきたからです。これにはなにも謙信だけではありません。信長の石山合戦を思い出して下さい。一向宗が悪いのではなく、宗教が政治に介入してしまうと、今の中東戦争のようにドロ沼化し、

一方が絶滅するまで徹底交戦になってしまうのです。余談ですが、家康は信長のやり方をみてきて、損失をさげ懐柔策をとるとともに、東・西に分裂させ、力を半減させてしまう対策をとりました。その家康のお膝元の尾張国で生まれ育った（おそらく）高政の母（法雲院）は熱心な一向信徒。謙信の身内ならば一向宗のはずはありません。

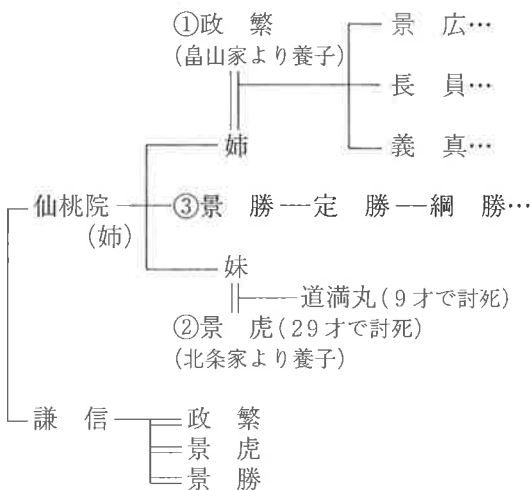
一、謙信に実子はいない。養子二人も、一人は討死（従って子孫はあっても歴史上記録に残ることはない）、もう一人も実子は男子一人のみ（上杉定勝）。

二、高政の母（法雲院）や祖父は一向宗徒で、当時、謙信は一向宗に悩まされていた。

右記の二つの理由から「謙信公の孫娘なり」とは事実無根だとごく最近まで思っていました。

実は謙信にはもう一人、養子がいました。パソコンの力でわかったことなので私の努力などではないのですが以下、三人目の、しかも一番年長者で一番長寿、子孫はちゃあんと江戸時代まで続いている「上じょうしゅうまじけ条政繁」の略歴です。（信玄との関係は系図Bで）

以上のことを考え、少し飛躍した推論ですが、高政の母の父といわれる瀬尾小太郎の生地と、上条政繁の生地が「能登」という点で一致したことから、同一人物とは考えにくいけれど、何らかの接点があるわけで、養女、あるいは公然の秘密として「謙信公の孫姫」が存在したのではないか、では実際に上条政繁に娘はいったのか？ 残念ながら今のところ不明。でも男子三人は存在し、子孫



上条政繁

出典: フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

上条 政繁（じょうじょう まさしげ、天文14年（1545年） - 寛永20年8月13日（1643年9月25日））は、戦国時代の武将。上杉謙信の養子の一人である。実兄は能登畠山氏の当主・畠山義綱。正室は上杉景勝の妹（姉説あり）。

元の名を畠山義善という。上杉謙信の人質として連行されたが、やがて謙信からその優れた才能が気に入られてその養子として迎えられた上、上杉氏の一門である上条の家督を継ぐことを許され、景勝の妹と結婚して謙信の養子として迎えらるるなど、破格の厚遇を受けていた。謙信存命中から織田信長や北条氏政らとの戦いで各地を転戦して武功を挙げた。

謙信の死後の上杉氏における後継者争い御館の乱において、政繁は景勝側について武功を挙げた。その後も、織田信長の侵攻が激しくなったため、政繁は織田軍の侵攻を食い止めるために松倉城にたびたび向かい、武功を挙げている。1582年の本能寺の変で信長が死去したため、織田軍の侵攻が無くなると、政繁は景勝の命令を受けて松倉城から海津城の城将となる。1583年には景勝に対して景勝の側近である直江兼続を自分の麾下の奉行として派遣することを強要したが景勝によってはっきりと断られている。1584年に秀吉の元に政繁の息子（景勝の甥。この時まで景勝に子がいなかったため）を質として送ることが決まるとその代償として軍役と領内の諸役を全て免除された。そのため海津城には須田満親が入ることになる。1586年景勝が上洛する時に政繁も一緒に上洛したがその後上杉家を出奔した。

その後は徳川家康の家臣となり、姓を上条から畠山に戻した。徳川家の家臣として江戸で暮らし、1643年に99歳という長寿をもって死去した（一説として1625年没）。後に上杉氏とは和解して政繁の次男・長胤が旗本上杉氏を設立している。

政繁が上杉氏から出奔した理由については、景勝と信濃国統治をめくつての対立があったとされるほかに、景勝の側近として頭角を現していた直江兼続による讒言説、さらに当時上杉氏に叛旗を翻していた新発田重家と親しい仲にあった説、かつて謙信の養子であったことから、その存在を景勝と兼続に危険視されて追放に追い込まれたと言う諸説がある。

を残している以上、娘もいるはず!?いえ、いてもらわなければ困るのです。その娘こそ、高政の母であり、毛利家と上杉家をつなぐ女性だからです。

その女性が法雲院であれば「謙信公の孫姫」と記されても領けるのです。あながち、ないことではありません。政繁の妻は、謙信の姪（養子の景勝の姉）にあたりますから、わずかながら謙信の血も流れているし、系図上ではれっきとした謙信公の孫なのです。ただし、これらはいくまで仮定。史料不足で、まだ発表するには早くて申し訳ないのですが、伝承とか言い伝えは全くのデタラメではなかった、まして活字になって残っていると云うことは、事実に近いものがあるということもわかりました。※法雲院が謙信の孫というパターンは、そのほかにいくつか考えられます。

一、謙信に養女があり、その娘が瀬尾小太郎と結ばれた。

二、若死した景虎に娘がいて、その娘が法雲院であった。

三、瀬尾小太郎本人が謙信の養子だった。

等ですが、いずれも史料不足で、まだまだ研究していかねばなりません。

閑話休題

二〇四号、林氏の「毛利数馬は高成の弟ではなかった」拝読しました。歴史に「if」はおもしろいのですが、江戸時代に、正室の子をさしおいて側室の子が家督を継いだ例はありません。江戸幕府そのものも許可しませんでした。特に江戸時代の初め頃、まだ戦国時代の生き残りが家中にいる場合、後継者が幼い時は、初代とともに戦場をかけめぐって今の地位を築いてきたという自負があるだけに、実務経験もなくチャホヤされて育った二代目、










三代目に不満があり、それをとりまく家臣グループも二派に分かれて反目する……それは現代の企業や家族にもありがちなことですよね。

数馬が高成より年上なのは、40歳すぎても嫡子に恵まられなかった高政夫婦にとっては、長子の数馬はもう少し年上だったかもしれません。ただし、たとえ10歳年上で、その上、聡明であろうと、側室の子は側室の子、正室の子をさしおいて藩主の座にはつけません。それだけ女系は大切にされていたし、本人の資質はどうあれ、システムさえ整っていれば藩政は動くしくみなのが江戸時代なのです。数馬を家老という臣下にして、あくまで毛利本家の補佐役としたというのは、高政の深い配慮があったと思います。

すべて調べたわけではありませんが、初代の血統は、だいたい四代〜七代目でほとんど絶えています。本当です。佐伯毛利家四代・徳川家七代・前田家五代というふうには。それにしても、歴史上の超有名人である信玄と謙信。この二人の三代目、四代目ともなると、驚くほど病弱であっけなく亡くなっています。高政は70歳近い長寿だったのに対し、子の高成は29歳、その子高尚は32歳、

武田信玄と上杉謙信

上杉謙信		武田信玄
享祿3年 (1530) 1.21 幼名：長尾虎千代		大永元年 (1521) 11.3 幼名：武田太郎
7歳：平三景虎と改名		16歳：晴信と改名
14歳：栃尾刈谷田川の戦い		15歳：海の口攻め
生涯独身		17歳：三条公頼の娘
32歳：上杉憲政に家督を譲られ、上杉輝虎と改名 41歳：剃髪して上杉謙信と名乗る		39歳：出家し、武田信玄を名乗る
春日山城		三ツ石 駒崎ヶ館
天正6年 (1578) 3.13 脳卒中 不藏院殿興光謙信		天正元年 (1573) 4.12 ガンまたは肺結核 恵林寺殿機山玄大居士

そしてその次の高重は21歳。前号でも発表しましたが、武士が専門の武士となった江戸時代は、逆にいえば実務の場がなくなった時代でもあります。体力を使わなくなれば、やはり寿命そのものにも影響がでることです。よね。なんでもバランスが大切。現代にも通じることです。